

映像資料・解説



（公財）日本ハンドボール協会競技本部

競技・審判委員会

映像① タイムアウト後、再開と同時に公示時計が動いていない

（状況）

得点后レフェリーはタイムアウトをとり、プレーヤーに退場を与えた。時計は前半 29 分 59 秒で止まった。再開のスローオフの笛と同時に、時計が動かなかった。

（正しい処置）

- ・レフェリーは残り時間を見て、終了合図の後に退場を示すのがよりスマートである。
- ・再開の笛の後、公示時計が動いていないだけなので、MO・TDは前半の競技を終了させてよい。時間を戻す必要はない。

映像② 後半残り 5 分間際でのチームタイムアウトの申請と競技時間

（状況）

チームは後半残り 5 分の状況で 2 回目の T T O を請求したつもりであったが、時計は 25:00 で止まった。（映像はそれまでのリプレーが流れる）レフェリーの再開の笛の後、TDの合図によりレフェリーはタイムアウトを取り、時間を 25:01、つまり残り 5 分で請求できる 1 回の T T O を使ったと言うことで公示時計を修正し、競技を再開させた。

（正しい処置）

- ・映像では明確ではないが、請求の時間は 25:00 の前であり、止められた時間は 25:00 である。MO・TDは、この時間帯には敏感になるべきで、この場合は、あと 1 回を残した後半 1 回目の T T O として認めるべきである。
- ・T T O は 5 0 秒間ある。その中で、いまの T T O の請求時間等について、MO と TD は確認する。もし、残り 5 分を切っていたならば、5 0 秒の合図の後、競技が再開される前に、TD がチーム役員へ「すみません。微妙なタイミングでしたが、いまの T T O は残り時間 5 分を過ぎてからでした。」等、丁寧に伝える。
- ・競技再開後に、安易に公示時計を操作しない。

映像③ タイムアウトと同時の公示時計が止まらなかった

（状況）

タイムアウトを取り、レフェリーは退場を判定したが、公示時計が止まっていないことをタイムキーパーを務める TD が即座に気づき、競技再開をさせずに公示時計を修正させて対応した。

（正しい処置）

スマートな処置である。タイムキーパーを務める TD は、タイムアウトと同

時に、自らの時計を止め、公示時計が止まっていることをすぐに確認し、止まっていない場合は、自らの時計で時間を示し、修正を指示する。競技の再開を止めるように通信機器等を用い、レフェリーへ知らせることも必要。

映像④ 終了間際の得点かどうか微妙な場合

(状況)

競技終了の合図とほぼ同時に、ボールはゴールラインを通過した（この映像の角度からはわからないが、ボールがゴールネットを揺らしたと同時にブザーが鳴ったので、得点と判断できるが）。レフェリーは、TDと協議もせず、コートレフェリーが得点を認めない決定を下し、前半を終了させた。

(正しい処置)

- ・残り10秒から、通信機器を使用しているTDまたはMOによって、レフェリーにカウントダウンをしながら残り時間を知らせる。
- ・通信機器の環境がない場合は、レフェリーは公示時計が観察できる場所、あるいは競技終了の合図が聞こえるタイミングに集中し、決して観察を怠ってはならない。
- ・カウントダウンを受け、明確な状況であれば、ゴールレフェリーが判定を下す。事実判定であり、MO・TDはそれを覆すことはできない。
- ・MOまたはTDは、確認の意味も含め、ゴールレフェリーに確認する。微妙な場合は、レフェリー、TD、MO相互で確認を行い、判断を明確に下す。（レフェリー任せ、TD任せ、MO任せにはしない。）

映像⑤ 競技を再開したが、公示時計が動いていないのでレフェリーは競技を中断した

(状況)

タイムアウトのあと、レフェリーは競技を再開したが、公示時計が動いていなかったため、レフェリーは再びタイムアウトをとり、正しい状況で競技を再開させた。

(正しい処置)

- ・再開の前、レフェリーはテーブルに合図を送っておるが、テーブルからの反応はない。（通信機器で確認できていたかもしれないが、機械操作のローカルTKからの合図はない）。その状況でレフェリーは競技を再開させてはならない。
- ・レフェリー、TD、MOすべてが、試合開始前に記録席のメンバーに対し、常に明確なコンタクトを取るよう指示する。このような中断は、レフェリー、チームの集中力を切ることにつながり、決してあってはならない。

映像⑥ チームタイムアウトを請求したチーム役員が、まだカードを持ったまま選手への指示を始めた

(状況)

チーム役員がチームタイムアウトを請求し、記録席はそれを認めた。チーム役員は請求カードを持ったまま、選手への指示を始めたので、TDはチーム役員からそのカードを持ち去った。

(正しい処置)

- ・本来は、チーム役員はテーブルへ請求カードを提出すべきであるが、この場合は、請求を認めた以上、チームタイムアウト中におけるチーム役員の権利を保証し、カードを取り戻す等、チーム役員との余計な接触は避ける。
- ・50秒の合図の後、競技再開へ促す流れの中で、カードを取り戻すとよい。

映像⑦-1 着地シュートで得点を認めなかったが、点数は加算され、修正された

(状況)

レフェリーは明確に着地シュートの判定を下したが、スコアには4点目と追加された。(得点されたチームも得点されたかと思い、スローオフから始めようとした。)気づいたTDからの指示を受け、試合中にスコアが修正された。

(正しい処置)

- ・記録席のTDと機械操作を担当する地元役員は、このような得点でない場合は口頭で「今のは得点ではない」等確認を行う。この確認は、MOへも伝えること。(伝えなかったため、以下映像⑦-2の場面につながる)
- ・スローオフの後で、口頭で確実に現在の得点を確認していく。相手チームに加点する等、起こりうるミスを想定し、TD個人の判断で修正させることがないよう、MOにも伝え、丁寧に対応する。(伝えなかったため、以下映像⑦-2の場面につながる)

映像⑦-2 一度「1対4」にしたものを「1対3」に戻したので、MOに問い合わせがきた

(状況)

上記映像⑦-1のあと、競技が続行される中、スカウティング(集計・分析)担当と思われる役員や、MOに対し得点の確認を要求した。MOは、席を離れ、TDに確認した。その際、競技が中断された。

(正しい処置)

- ・TDは間違いに気づいた段階で、得点掲示を修正させる際、その修正はMOにも伝える。伝えていれば、MOより「今のは着地シュートの判定だったので得点は取り消した」等の説明ができ、競技を中断させる必要はなかった。

映像⑧ チームタイムアウト終了の合図から20秒後に競技が再開されている

(状況)

(映像はチームタイムアウト内のリプレーが流れているので音声に注目)50秒を知らせる1回目のブザーが鳴り、その10秒後に1分間を知らせる2回目のブザーがなった。(映像がもとに戻る)チームはまだ、ミーティングを行っている。この状況になって、ようやくTDが動き、再開を促した。20秒後に競技が再開された。

(正しい処置)

- ・TDは50秒の合図がなった段階で、チームのミーティングをやめさせ、1分後の合図に合わせて、競技を再開できるように促す。笛を強く吹き知らせる。
- ・ミーティングの場所が、コート内である場合は、50秒の合図の後、コートの状況を確認し、必要であればモップを入れる。

映像⑨ 不正交代の判定の後の競技再開

(状況)

TDは不正交代を確認し、笛を吹きレフェリーへ知らせた。レフェリーは退場の判定をした。その後の競技再開を、レフェリーは違反を犯したチームの交代地域より、相手チームのフリースローとしたが、TDが笛を吹いた時、ボールはゴールキーパーフリースローをしようとしたGKが保持していた。チーム役員の要望を受け、MOがレフェリーを呼び、競技規則通りにGKスローより競技を再開するよう伝えた。

(正しい処置)

- ・正しい処置である。レフェリー、TDは競技が中断された際、判定を下す前に次の再開方法がどうなるべきなのかを瞬時に判断しなければならない。笛を吹いたTDがレフェリーに状況を説明する。
- ・チーム責任者(A)の意見に耳を傾け、競技規則通りに適切に対処したMOの判断は正しい。その際、映像の通りボディランゲージを使って、周囲にも明確に伝えることが大切である。

映像⑩ 退場表示が相手チームに表示され、競技が再開された

(状況)

退場者が相手チーム表示された。MO、TD、レフェリーは気づかずに競技が再開された。

(正しい処置)

- ・競技を再開したのであれば、不要な競技中断は避けなければならない。この場合、退場の残り時間は正しいので、MO、TDがチームにその旨を伝え、そのまま競技をさせて良い。
- ・退場時間が満了する前に、タイムアウト等で競技が中断された場合は、その時間を利用して修正する。

映像⑪ GKの不正交代と得点チャンスの妨害(1)

(状況)

GK不在の状況で攻撃していたが、ボール所持が相手チームとなる。GKは速やかに交代したかったが、不正な交代を行ったため、TDが笛を吹き競技が中断した。相手チームは直接無人のゴールにめがけてスローしたが、TDからの笛の後、ボールがゴールに入った。

(正しい処置)

- ・不正交代にはアドバンテージを適用しないので、TDの笛のタイミングは正しい。
- ・笛の前に無人のゴールめがけてスローされ、ゴールに入る前に笛が鳴ったので、再開は7mスローとなる。

映像⑫ GKの不正交代と得点チャンスの妨害(2)

(状況)

ターンオーバーの笛の後、攻撃側はGK不在の無人のゴールに向かって直接シュートをした。GKが不正交代を行ったため、TDは笛を吹いた。ほぼ同時にボールはゴールに入った。

(正しい処置)

- ・不正交代にはアドバンテージを適用しないので、TDの笛のタイミングは正しい。
- ・TDからの笛の前に無人のゴールめがけてスローされ、ゴールに入る前に笛が鳴ったので、再開は7mスローとなる。
- ・GKとレフェリーが交錯し、危険な状況であった。通信機器を持っているTDまたはMOは、レフェリーに対し「GK不在」と明確に伝え、コートレフェリーからゴールレフェリーへ戻る際、このようなことにならないように通知する。

映像⑬ 退場時間が満了しないうちに、プレーヤーがコートに入り、TDが笛を吹いた (状況)

赤のユニフォームのプレーヤーが、自チームの退場時間が2秒残っているにもかかわらずコートに戻った。それに気づいたTDが笛を吹いてレフェリーに知らせた。新たな退場時間は掲示されたが、残された退場時間が掲示されていない。

(正しい処置)

- ・退場後のコートへの入場はチームの責任であるため、MOやTDから入場許可の合図を行ってはならない。
- ・レフェリー、TDで、コート上のプレーヤーの人数および退場時間について確認する。掲示すべき時間は、「残された退場時間」および「新たな2分間の退場時間」の2つである。
- ・満了しなかった退場時間を補うために減らしたプレーヤーは、あくまで人数の調整のためであり、そのプレーヤー個人に罰則は適用されない。(余分なプレーヤーが入って競技が継続され、気づいた際、最後に入ったプレーヤーが特定できないときに、チーム役員に指名させるプレーヤーとは、この場合は異なる。)

映像⑭ フリースローの笛の後に起こった不正交代 (状況)

攻撃側にフリースローが判定された後、TDより笛が吹かれ、攻撃側チームに不正交代が行われたとレフェリーへ知らせた。レフェリー、TD、MOとも競技の再開は、違反が行われた場所から、相手チームのフリースローと判断した。

(正しい処置)

- ・フリースローの判定の後、競技の中断中であるので、競技の再開は、攻撃側のフリースローである。
- ・MO、TDは競技が中断された状況を適切に捉え、競技の再開についてレフェリーへ助言する。

映像⑮ 退場者がいるにも関わらず、7名のプレーヤーがコート上にいる (状況)

攻撃を終え、帰陣した際、1名退場者がいるにも関わらず、GKを含めた7名で防御していた。TDは気づいて競技を中断させたが、自ら交代地域へ戻るプレーヤー、交代地域から戻るプレーヤーの2名に対し、違反したプレーヤーを特定できず、交代地域側に近づいたプレーヤーを示した。実際は速やかに交代地域へ戻った13番が余分に入場した。

(正しい処置)

- ・TDは、自分が位置する側にいるプレーヤーの入退場を管理しなければならない。特に退場者がいて、GK不在の攻撃を行う際など、細心の注意を払うべきである。
- ・この場合、最後に入場したプレーヤーが特定されない場合は、競技規則に則りチーム役員に退場となるプレーヤーを指名させる。チーム役員が拒否した場合は、TDが指名する。

映像⑩ ノータイムフリースロー時の不正交代

(状況)

ノータイムフリースローとなった際、防御側は2名のプレーヤーを交代させた。先に22番、その後が続いて23番がコート外に出、その後31番、11番が入場した。交代できないことに気づいたチームは、31番、11番をさげ、再び22番、23番をコートに戻した。31番は不正入場により退場になるので、レフェリーは、防御側プレーヤーのうち1名をコート外へ出るように促した。22番がコート外へ出た。

(正しい処置)

- ・ノータイムフリースロー時の、防御側の交代はできないので、この場合、交代として最初にコートに入った31番が退場として罰せられる。22番、23番は交代が認められないのでコートに戻ることができる。
- ・TDは前半、後半の競技時間終了の際、ノータイムフリースローがある場合はチームを落ち着かせ、競技終了と勘違いしてコート内に入ったりすることがないように注意を払う。
- ・ノータイムフリースローの際、防御側にできないのは交代であり、コートから出、代替りのプレーヤーが入らない状況は違反ではない。従って、31番が最初に入場したことで、交代が成立し、31番が退場となる。

映像⑪ ファールされたチームの役員がレフェリーへアピールする

(状況)

自チームのプレーヤーが相手チームのプレーヤーより背後からファールを受けた。レフェリーは罰則なしで、フリースローの判定をした。(映像では見えないが)違反されたチームの役員が罰則を付加するようアピールをした。TDが競技を中断し、チーム役員に対し罰則を与えるようレフェリーに指示した。

(正しい処置)

- ・チーム役員の言動に対し、ベンチ側に座っているTDはその観察責任がある。チーム役員が、大きな声で、ジェスチャーをつけて判定に対して抗議した場合は、TDは毅然と対処する。立ち上がり、チーム役員の近くまで行く。この場合、ベンチの後ろからではなく、コート側より近づく。そして、柔らかく、人間性を持って、落ち着かせるように促す。
- ・チーム役員に対し、TDやレフェリーがどのような態度を示すかも、観衆は注目する。TDが椅子に座ったままで対応しても、周りにはわからない。従って、TDの動きは、チーム役員をこれ以上興奮させない意味でも必要となる。
- ・マッチオフィシヤルが配置されている場合でもまずはTDが対応すること。
- ・TDの制止に対し、従わない場合はMOが対応することになる。

映像⑱ TDの制止直後に、繰り返しレフェリーアピールしたので、MOがレフェリーへ罰則を与えるよう指示

(状況)

オーバーステップのアピールをジェスチャーを交えて訴えていたチーム役員に対し、TDが対応した。TDが戻る際、そのチーム役員は再びレフェリーに対し同様のアピールを繰り返した。MOが、笛を吹き、レフェリーを呼び、罰則を与えるように指示した。

(正しい処置)

- ・スマートな対応である。お互いが感情的になることを防ぐ意味でも、最初に対応したTDが、制止の後、興奮し機械的に罰則を適用する雰囲気にならないことが大切である。従って、TDは、注意を入れて落ち着いた後は、その場を離れること。
- ・その後のチーム役員の観察はMOが行う。TDの制止に従ってくれたのであれば、視線が合った際にほほえんだり、うなずいたりと温かく受け入れ、映像のように指示に従わない場合は、決して放置せず、罰則の適用を促すことが必要である。

映像⑲ 相手チームへのアドバンテージを認めてから、TDが競技を中断する

(状況)

違反があったか、なかったか微妙な状況であったが、レフェリーは違反がないとすることで競技を続行させた。チーム役員がジェスチャーを交えて抗議していたので、TDは相手チームの単身速攻の結果を見た後で競技を中断し、チーム役員への罰則の適用をレフェリーへ促した。

(正しい処置)

- ・正しい処置である。不正交代ではないので、この場合は、アドバンテージを認めてから罰則を適用すること。
- ・不正交代の場合は、アドバンテージを考慮せず、即座に競技を中断しなければならない。